月刊

えくてびあん

立川と語ろう　立川に生きよう

11

(EKUTEBIAN VOL.12 NOVEMBER 1993 EKUTEBIAN)

まい　あーと■デコクレイクラフト「ピエロ」by 浅野恵子

杉浦 章のBouillabasse

"海の幸のブイヤベース"

5年前に柴崎町2丁目の「ビストロすぎ浦」は開店した。料理界の大御所・田中徳三郎のいるパレスホテルで修行すること13年。エリートへの道を選ぶこともできたが料理にかける情熱は、キリッシュのブランデーよりも熱く、カナダへと渡る。世界的老舗のホテル、『カルガリー・イン』で各国から集まったコックと共に五カ国語の飛び交う厨房で8年を過ごした。そして、これから伸びる街・立川と見込んで店を構えた。その野生味溢れる本格派の信念は、飾らずに材料の良さを引き出すこと。今回のブイヤベースも北海道のスズキなど、素材にこだわり、絶妙なハーモニーを醸し出した。純朴でありながらあたたかい杉浦さんの人柄そのままの味が出ている。

撮影：井上義治

えくてびあんレポート

ノスタルジー立川

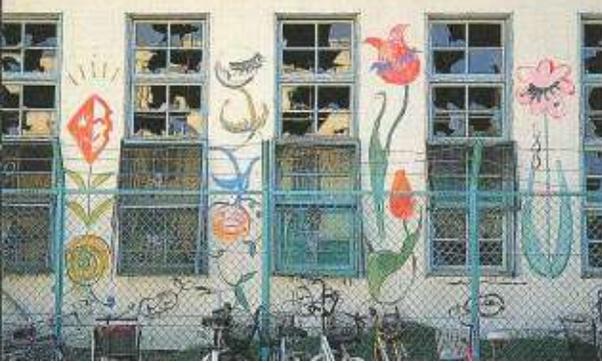
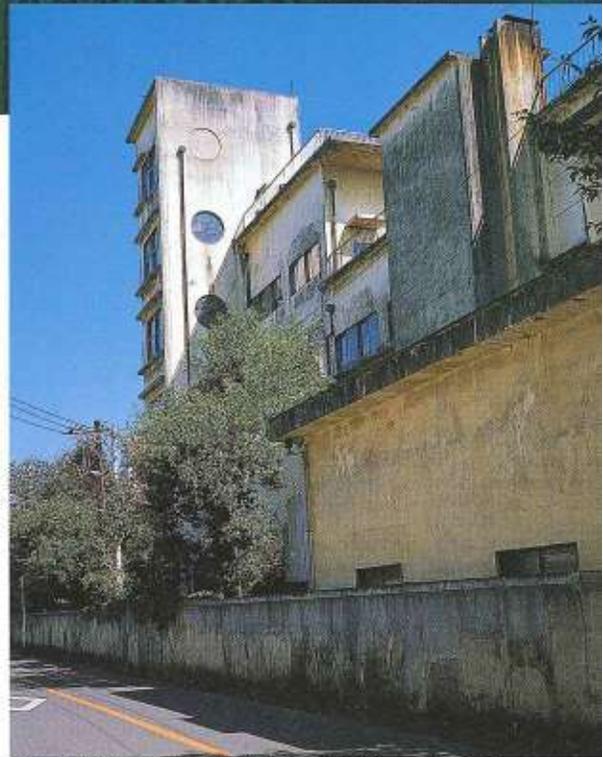
再開発の大きな波に汲みこまれ消えていった街角。
六年生のときウインドウに飾られた真っ白なドロップハンドルの自転車に憧れていたあの店。
中学の頃、ちょっとHな映画をこっそり見に行ったときのドキドキが胸に残る映画館。
建ち上がっていくビル群を見上げると、
ダムの水底に眠る村のように
僕の想い出もこの地底に沈んだのかと想う。

撮影：武田和巳

ここで結婚式を挙げた人も多いのでは……望仙閣

看板にも趣があった……岡野自転車店

昭和8年創業……高砂湯

壁画の跡が目印だった……基地跡の駐輪場

若大将シリーズを見たのは、ここで……立川セントラル

府立二中からの、伝統を感じさせる校舎……立川高校

コンビニのない頃、夜遅くまで開いてて助かった……うおぜん

立川トピックス

すすきのミミズクがやってきた

この秋、シリーズで行われている昭和記念公園の子供の森教室では、十月九日(土)秋の土手や河原で風になびいている、すすきの穂を使ったミミズク作りに人気が集まった。すすきのミミズクは東京の代表的な郷土玩具の一つで昔から親しまれてきたもの。元祖は豊島区雑司ヶ谷の鬼子母神の境内や参道で売られていたが、今ではわずかに二人の女性だけが作っている。2、3日すると毛がふんわりと膨らんで何とも言えない愛敬のある姿に変わる。子供たちは自分で作ったミミズクを大事そうに持ち帰って行った。

江戸時代体験が出来る?

立川市は、江戸時代から伝わる生活文化を実体験してもらおうと、幸町の小林秀和さんが所有していた民家を幸町4丁目に移築して、「古民家園」として、十月十七日開園した。復元された母屋は江戸時代末期の嘉永四年(一八五一年)に建築された貴重な建物。北西に配置された「オク」の間は、武家屋敷の書院に当たる部屋で珍しい。生活道具が展示されているだけでなく、昔の暮しを体験できるようになっている。今後は、まゆ玉や十五夜などの年中行事の他に、園内の庭や畑を使って農作業体験、養蚕、みそ作りなどが予定されている。

真如苑だより

朝のひんやりとした空気が身を引締めます。千里も見とおせるような、透明感が日本の秋にはあるように思います。

背筋をピンと張った大輪の菊の美しさ、馨しさもこの季節ゆえでしょうか。お諏訪さまでは恒例の「菊まつり」が催され、見事な作品を毎年、楽しませてくれます。

秋冷の候、真如苑では皆さまのお越しを、こころからお待ちしております。

■日時　11月15日(月)　2時～4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

「集まれっ！番号っ！いちっ！にっ！よしっ！消火っ！」威勢のいい声が飛ぶ。動作もきびきびとしていて、うん、これならば安心。それもそのはず、こちらは、消火のスピードと敏捷性を各企業、団体で競う「自衛消防隊訓練審査会」の風景。立川消防署開署50周年を記念して盛大に行われた。

9月30日(木)、澄みやかに晴れ渡った秋空の下、立飛企業野球場で、第20回自衛消防隊訓練審査会は開催された。立川、昭島、及び国立の三市内43事業所から50隊149名の参加を得て、特に今年は、立川消防署開署50周年を記念し、盛大に行われた。

この審査会は、各事業所がそれぞれの消防計画に基づき、火災や地震などの災害に備えて、従業員により組織している自衛消防隊の活動能力を審査するもの。

男子隊組の他に12組の女子隊が参加し、お揃いのユニフォーム姿で職場の防災を担うウーマンパワーを披露した。この日、審査委員長をつとめた須賀久郎署長は、「キビキビした皆さんの行動を見て、とても頼もしく思います。これに満足することなく更なる精進をお願いします」と講評を述べた。

多くの企業では、新人教育の一環として役立てており、敬礼から始まる機敏な所作を身につけられることから、厳しいけれど充実していて楽しいと若者にも好評だ。

女子隊で7年連続優勝、またまた、無敵を実証した伊勢丹立川店の高橋利之安全担任は、こう述べる。「この訓練に賭けてゆく充実感がそのまま、仕事のパワーになってゆくようです。」

色とりどりのユニフォームで、明るいパフォーマンスを見せてくれた若者は、アクシス立川、モノレールなど都市型リスクが増大するこの街の未来にも安心を与えてくれている。

消火・・・よし・・・集まれ！

◀さあ、放水だ！
◀さすが抜群なコンビネーションが陸上自衛隊東立川駐屯地
全員集合！▶

▲男子隊優勝は立飛企業
◀女子隊常勝の伊勢丹立川店
愛敬がある敬礼は西砂ホーム▶
◀準優勝の高島屋立川店
▼厳しい審査が…
機敏な動作も審査の基準▶
◀落ち着いて火災を知らせる、モリタウン管理
▼消火にかかれ／ヤクルト本社中央研究所
▲応援にかけつけた至誠ホームの方々

ことわざ問答 44

漢字一字挿入せよ

□文銭は鳴らぬ

近惚れの□飽き

ヴェニス旅情

鉢呂 祐二(写真家)

ヴェニスでは、車が走っていない。これは驚きだ。これまでアメリカ、フランス、スイス、インド、タイ、インドネシア……と旅をして、いつもうんざりするのは車の多さだった。それも日本のメーカーの車を見るたび、うれしいような、申し訳ないような、不思議な感情にさいなまれていた。

環境破壊への問題提起をテーマとする写真を本格的に撮り続けて4年。ブラジルで行われた地球サミットのイベントの一つ「世界環境フォトコンテスト」に入賞したのは、山積みの車のスクラップが被写体。二科展で入賞したのも自転車のスクラップを中心に据えた作品であった。そのような訳で、つい、車公害のことに眼が向いてしまうようだ。

ヴェニスの主な交通手段は、水上バス。ほど良く歴史感を漂わせた橋をいくつもくぐりぬけて、到着したのがカステロ公園。

創設以来、約一〇〇年を迎える第45回ベネチアビエンナーレの会場である。現代アートの祭典。各国のパビリオンが自国の作家をバックアップして芸術性を競っている。日本の代表作家は、草間弥生氏。無限に増殖する水玉や網目のイメージを作品にする彼女のパワーは、どこからくるのだろうか。はかりしれないものがある。16年間のアメリカの生活が国際作家として活躍する土台になっているという。レセプションにオノヨーコ女史と息子のショーン氏が駆け付けたのは、何より彼女の偉大さを物語っている。

会場では、牛のホルマリンづけや巨大なビニールハウスまでも芸術作品として公開されている。いったい芸術とは、美術とは何なのか。不可思議なのである。一〇〇〇点を越えるコンテンポラリーアートを前にして、私なりの鑑賞方法がある。自慢ではないが見るのは早い。おそらく普通の人より8倍は早い。直感でおもしろいと思った作品の前でのみ、足を止める。それを何度か繰り返して自分の好きな色、形、傾向を再認識、あるいは新発見をする。そうすることによって、その後鑑賞する展覧会のセグメントや日常生活の中に、自分のアメニティ感覚を生かすことができる"切り捨てゴメン"の勇気と眼を養うことが大切ではないかと思う。

会場を出て近くを散策することにした。人が一人やっと通れるほどの道幅。そのような路地がいっぱいある。自由な風が通り過ぎゆく路地裏にこそ、カタルシスがころがっている。飾らない、ありのままの景観。吹きさらしの路傍、人の気配。そのすべてが私のイマジネーションを刺激する。日差しは強い。洗濯物を干すロープが道路越しに他人の家と家の茶の間を結んでいる。見事に乾きが早い。下町の人々の心のふれあいのような、あたたかさが感じとれる。猫も元気だ。天敵の"車"がいないせいもある。鳩も多い。

私の作品の被写体が最近、無機質のものから、動植物のような有機質のものへと変わってきた。これは"生なる地球のうるおい感"。言いかえると"水"への畏敬の念が私の中でふくらんでいるのだと思う。そんな思いが北イタリアの水の都「ヴェニス」、この地に私を導いたのかもしれない。水の流れに沿って人々が集まり、集落が形成され、やがていくつものドラマが展開される。森の動物たちが元気にはね回っているのも、都市の緑がうるおうのもすべて"水"の恵みがあればこそ。この万物のエネルギーとのつきあい方を模索することは、人類の永遠のテーマかもしれない。

今回の旅で得たもう一つの"うるおい"は、ツアーメイト30人との交流であった。大学教授、美術評論家、学芸員、画廊主、美術教室の経営者、会社社長、OL学生、等々。今を輝いて生きている人たちとのひととき。美術鑑賞に始まって、水上バス、ゴンドラ、突然のスコール、落雷、早朝の散歩、レストランでの歓談、ショッピングなど、この共有した珠玉のような時間を決して忘れることはないだろう。旅の重さを実感した。

西洋厨房 グランディール いよいよ オープン！

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん／
リストのお店にはいつでも えくてびあん／

ことわざ問答 答

一文銭は鳴らぬ
銭一枚ではいくら振っても音がしないように何事も協力者がいなくては成就しない。

近惚れの早飽き
惚れっぽい人は、また飽きるのもはやい。浮気者は多情で気が変わりやすい。

月刊えくてびあん 第112号
平成五年十一月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル6F 〒190
電話 〇四二五(28)0082
FAX 〇四二五(28)1297
編集発行人 立井啓介
印刷所 ㈱大廣社
(編集) 池田陸男 隅川理 名尾晋真 中村絵里 原田悦子 半沢正弘 町田健一 山田恵子
(写真) 天野武男 板橋一明 井上義治 スタジオ269 枝川一巳 本多修

表紙は語る

まい あーと デコクレイクラフト「ピエロ」 by 浅野豊子

今回の作品はイタリアで生まれた、新しい粘土工芸のデコクレイクラフト。

立川美術会に属し、中央公民館で創作教室の指導にも当たる浅野豊子さん。学生時代はむしろ、美術は得意でない方だったとか。しかし、上手下手ではなく、作った人の心の温もりが伝わって来る粘土工芸の魅力に誘われて、このジャンルを始めた。

植物の葉の染み具合いや苺の色のくすみ加減など、実際と少し違っていても、その人の感性が捉えた色や形をうまく表現できたなら、かえって、本物らしく見えてきて、感動を与えるという。

また、人形を作る時には自分の表情に似てくるので、できるだけ楽しい気分の時に作るように心がけている。このピエロをよく見ると、一人一人の表情が違う。一体一体、制作した時の浅野さんの気持ちが込められているのだろう。

植物、果物、花、人形と様々なものを作ってゆく。これからは、レリーフ調のしっかりしたもので、それでいてあたたかいものを創りたいと語る浅野さんだ。

東風

鉢呂祐二さん(錦町)は環境破壊をテーマにした写真を撮り続けているが、彼の展覧会もユニークな手法で環境問題を訴えている。ファックス用紙の赤い線の入った切れ端を根気よく六年間集めて、会場の壁いっぱいに貼りつけたり美しい絵がゴミ袋の中に入っていて、ところどころ、火で穴を空けて、覗ける空間を作ってあったり…◆今も十年間かけて、集めて回った画廊、美術館のチケットでコラージュを作成中だ。

今夏は、イタリアの水の都・ヴェニスと中国の水郷都市・紹興(しょうこう)を訪ねた。紹興では、ガスパイプが地上に突き出たものや廃虚などを危険を冒して、真剣に撮影する鉢呂さんにガイドが尋ねた◆「中国には上海等、きれいなところが沢山あるのに何故、そんなに汚いところばかりを熱心に [illegible] なければいけない仕事だと思うからと応えた。三千年の歴史を持つ中国の川の水もだんだんと淀んできている。

美しいものを護るために、取り戻すために訴えなければならないものがある。かつて、一人の写真家がミナマタを世界に伝えた。日本の河川の汚れには歯止めがかけられたと云うが、かつての美しさを取り戻すには、まだまだ先は長いようだ。◆多摩川が妙にまぶしい　えくてびあん

立川クイズ

多摩が東京府に移管されて百年を記念するイベントも今月で終わります。イベント最後の締めくくりとして百年前に遡ってみましょう。明治26年2月に帝国議会に多摩の移管法律案が提出されて、わずか10日間で議会を通過、4月1日には移管されてしまいました。この突然の移管は、その後の多摩の歩む道に大きな影響を与えたのです。では当時、移管にあたり多摩の人々の受け止めかたはどうだったのでしょうか。

①南多摩の町村長が団体で辞職までして移管に抗議した
②多摩全域がお祝い騒ぎで移管を喜んだ
③住民が知らないうちに移管が済んでいた

【10月号の答】❶

立川に四つある日本一には競輪施設の売上高が含まれます。立川の競輪は立川市が運営していて、売上は市の収入になるのです。いろいろと問題はありますが、立川のためには役にたっているようですね。

眼が語る

眼は口ほどにモノを言う。
コトバにならない思いも語る。

No.4 売る眼

「いらっしゃい！」かけ声と共に親しみのある眼差し。新鮮な野菜や果物、生きのいい魚を早朝の市場で仕入れて待っていてくれる。いつも作りたての美味しさ、温かさで待っていてくれる。商品への自信とお客さんへのまごころが売る眼の中に込められている。

撮影：加藤正嘉

ケンタッキーフライドチキン
立川店
（曙町）
藤原真紀さん

新藤青果店
（高松町）